第５章

HISTORY

古くは律令時代に遡る 讃岐平野の1丁目1番地

律令制が引かれた古代奈良時代に讃岐平野の文書に残る歴史は始まります。
現在も駅名に残る「公文明（くもんみょう）」という名は古代の役所の名残「公文所」が設けられていたといわれています。公文所とは奈良・平安時代に租税や所領、年貢などをつかさどった役所です。白山から長尾にかけて、碁盤目状の田畑が多く、白山山頂からもはっきりと確認できます。当時の讃岐平野の条里制の基準が白山であったことはあまり知られていません。

現在の三木町は明治23年当時「平井村、奥鹿村、田中村、氷上村、下高岡村、井戸村」の6つの村が幾度かの合併の後、昭和31年9月に合併して出来上がりました。

三木町の古い歴史を知りたい方は一度、池戸公民館へ。以前は郡役所として機能していた場所で、今もその建物は町指定文化財として大切に保管されています。

■三木町変遷のあゆみ

明治23年2月
13村→6村

平井村 ―― 平井町（大正8年4月：町制施行）
奥鹿村 ―― 神山村（昭和16年1月：村名改称）
田中村
氷上村
下高岡村
井戸村

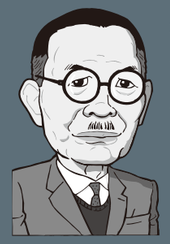
三木町
昭和29年10月1日　5町村合併

合併（昭和31年9月30日）

大字井戸
昭和地区
長尾町へ編入
（昭和34年11月1日）

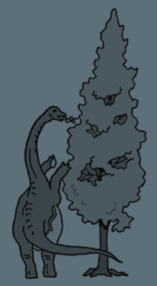
池戸公民館（旧郡役所）

三木町の偉人



地道な化石調査研究、メタセコイアを発見。三木 茂さん

世界的に認められる植物学者、三木茂博士は今から百十余年前に三木町鹿庭で生まれました。彼は生きていた化石=メタセコイアを発見し、命名しました。「科学は低い所があると、全体の進歩が阻まれる。基礎資料づくりの完成に全力をつくすつもりでいる。」との信念で、その後も多くの植物遺体（化石）を集めました。彼の研究は、植物学だけでなく古生物学や地質学まで幅広く貢献しています。



農業の向上・発展に生涯至力した 奈良 専二さん

三木町池戸出身。8歳で一輪車の原型=猫車を考案し、さらにコロ馬鍬を創作したほか、精米機、砂糖しめ機など多くの農機具の改良を行いました。60歳で上京し、研究や提案などの成果を出版。内国勧業博覧会でも度々受賞します。68歳で秋田県の農民の熱望に応え、地元に大いに貢献。農業の向上・発展の基礎づくりに至力し、明治の三大老農と言われています。緑綬褒章受賞。
死後32年後に従五位を贈られています。

紅型（びんがた）の復興と首里城の復元に寄与 鎌倉 芳太郎さん

沖縄に伝わる美しい衣装と紅型に魅了された彼は、すたれゆく紅型を後世に残そうと熱心に調べ、消えゆく型紙や布を大量に自費で集めました。更に職人からその染め方も学びます。後に自力で復元し、新しい創造性を加えて作品を制作し、型絵染で人間国宝に認定されました。
また彼が調査した「鎌倉ノート」は、沖縄の文化、芸術、民俗、建築など様々な分野の克明な第一級の資料として国の重要文化財に認定されています。

三木町の伝統工芸士

竹彫りの魅力に惹かれて70年 彫一刀彫 西村 文男さん

平成29年に厚生労働省の「現代の名工」に選出された竹彫工の西村文男さん。初めて彫刻刀を手にしたのは小学生のころ。父親の傍で彫刻刀を握りつづけました。高校卒業後は一般企業に就職するも、40歳を前に家業を継ぐことに。その当時は、全国各地の竹彫士を訪ねては竹彫りの技法を教わったそうです。
「竹は木と違って彫るのが難しいが、繊細な線を出せるところが、竹彫りの魅力。一人でも多くの人に竹彫りの魅力を伝えられれば。以前は生活のためにやってきたが、今後は一つでも多く良いもの残していきたい」「現代の名工」の受賞をきっかけに、竹彫りに対する情熱はさらに増しているようです。

スキのないフォルム、威厳ある鬼の顔 讃岐装飾瓦 神内 俊二さん

鬼瓦の一つ一つから職人の奥深い技術を感じます。神内さんは、家の屋根に魔除けとして乗せる鬼瓦を何十年と作ってきた讃岐装飾瓦の伝統工芸士。土選びから成型、そして焼き上げまでをすべて手作業で行います。
「さぬきと言えばうどん。そのうどん鉢の裏に顔があってもいいんじゃないかで、鬼の顔がついた、きっとこの世のどこにもないすごい器も生み出してしまった。」瀬戸内国際芸術祭に作家として参加し、中学生約3000人とともに女木島にたくさんの鬼［鬼瓦］で埋め尽くされた迫力ある景色を現出して見せたのも神内さんです。
実は神内さんは、こどもたちに鬼瓦作りを教えるワークショップも行っています。
笑顔が素敵な神内さん。その眼は今も粘土にまっすぐで、培った技術をもとに、創作への挑戦は続きます。

一生職人として生きる 讃岐桶樽 谷川 雅則さん

風呂桶や御櫃（おひつ）、風呂イスなど、讃岐桶樽（さぬきおけだる）を製造する、谷川木工芸の谷川雅則さん。
後を継ぐまでは桶づくりを手伝った経験もなかったため、最初は不慣れなことが多く「父親からよく怒られていた」と笑いながら話されます。
桶の外周部分は複数の木片を接合して作られているのですが、桶を上から見ると縁部分の木目が桶の中心に向かって綺麗に揃っていて、一つ一つが確かな職人の手仕事によってつくられ、細かいところにも上質な製品としての美しさがあります。
販売を通して若い人たちと接する機会があり、桶の存在や本来の使い方を知らない人もいて、桶を桶として使わない新しい価値観に驚き、これからの製品づくりについては「若い人が求めてくれるようなものを作っていきたい」と意欲的に取り組んでいます。
この職人として約40年一日一日立ち止まらず進み続ける姿勢が、伝統工芸士としての谷川さんの原点なのかもしれません。